

## 初期魯迅思想の拠って立つ所

高 橋 庸 一 郎

### I

中国で文化大革命が始まる三十年前に魯迅はなくなっている。今はその所謂文化大革命が終結してすでに四半世紀になる。魯迅は文革中に、本人が知らぬ間に非常に高い評価を受けていた。文革中に徹底的に貶められた歴史的人物の多くは、文革後名誉が回復され、また高い評価を受けるようになった。孔子などはその典型である。反対に文革中に高い評価を受けていた者で文革後そのぶり返しのようものがきて、評価は落とされた者も多い。歴史的人物の中からいえば、秦始皇帝などがその一人に当たるであろうが、秦始皇の場合は、兵馬俑の劇的な発掘があったために、ぶり返しもさほどではなかったようである。毛沢東についても文革後期の状況判断や政策決定、特に江青などの四人組に対する処遇には、脳軟化症のうわさなども相俟って、一時は大いに低められた事もあったが、やはり毛沢東なくして新中国は存在しなかったわけで、文革そのものは負の評価でも、毛沢東は今なお最高の評価であり続けて、すでに落ち着いていると言える。

魯迅については、毛沢東が、文革中に、「私と魯迅の心は互いに通じている」とか、「魯迅は文化的新しい軍隊の最も偉大で最も英雄的な旗手である」と最大限に高い評価を与えたのであった。毛沢東の魯迅に対する評価をもう少し具体的に詳しくここに提示してみると次のようである。

「魯迅は中国文化革命の主将であり、彼は偉

大な文学者であるばかりでなく、偉大な思想家であり偉大な革命家である。魯迅の骨は最も硬く、彼は豪も媚びるところが無く、これは植民地半植民地人民の最も貴重な性格である。魯迅は文化戦線上で、全民族の大多数を代表し、敵に向かつては突撃するのに最も正確で、最も勇敢で、最も固い決意を持った、そして最も熱烈沈着な、空前の民族英雄である。魯迅の方向が即ち中華民族の新文化の方向である。『新民主主義論』

“魯迅是中国文化革命的主将，他不但是伟大的文学家，而且是伟大的思想家和伟大的革命家。魯迅的骨头是最硬的，他没有丝毫的奴颜和媚骨，这是殖民地半殖民地人民最可宝贵的性格。魯迅是在文化战线上，代表全民族的大多数，向着敌人冲锋陷阵的最正确、最勇敢、最坚决、最忠实、最热忱的空前的民族英雄。魯迅的方向，就是中华民族新文化的方向”。

「魯迅の二句の詩、『眉を横たえて冷たく千夫の指に對し、首を俯して甘んじて孺子の牛と為らん』、を我々の座右の銘となすべきである。『千夫』はここでは敵を云い、どのような凶惡な敵に對しても我々は決して屈服してはならない。『孺子』とはここではプロレタリアートと人民大衆を言う。すべての共産黨員、すべての革命家、すべての文芸工作者はみんな魯迅という模範に学ぶべきであり、プロレタリアートと人民の『牛』となり、力を出し尽くして、死ぬまでやめるべきではない。『延安文芸講話』

“魯迅的两句诗，‘横眉冷对千夫指，俯

首甘为孺子牛’，应该成为我们的座右铭。‘千夫’在这里就是说敌人，对于无论什么凶恶的敌人我们决不屈服。‘孺子’在这里就是说无产阶级和人民大众。一切共产党员，一切革命家，一切革命的文艺工作者，都应该学鲁迅的榜样，做无产阶级和人民大众的‘牛’，鞠躬尽瘁，死而后已”。

ここに並べられているのはすべて極めて抽象的な賛辞ではあるが、当時の中国の「人民大衆」は率直に理解できたであろう。なぜならすぐ目の前に其れを納得させるような現実が渦巻いており、その中で人々はここで賞賛されているような人物即ち鲁迅のような人物がすぐ近い過去に存在したという事実を提示される事によって、益々運動の現実が身近に感じられ、益々自分のそのような変身と、そのような人間の更なる出現を希求するようになったからである。

ただ毛沢東は「人民」の語を多く用いているが、鲁迅は「中国人」の語はよく用いるが「人民」は使っていない。実はここに「人」に対する毛沢東の認識と鲁迅の捕らえ方の相違が現れているように思える。

## Ⅱ

人民の語は、古くは、「周礼」や「孟子」「管子」等にも見え、また民国時代にも多く使われた。しかし近代中国革命の中で使われた人民は、それらとは少し違うように思われる。これは言わずもがなのことではあるが、毛沢東を中心とする革命家たちの使う中国人民の人民とは、「目覚めた人々」或いは「目覚めるに違いないと信じられる人々」の意味である。目覚めない人々、或いは最後まで目覚めないかもしれない人々は寧ろ「大衆」の中に入れられていたのかもしれない。

鲁迅の言う中国人は全体的には、階級的網掛けのされていない、歴史全体を通じて存在してきた全中国人という意味である。ただ鲁迅の心の大きな部分を占めていた中国人は、其れは力

なく何の権利も持つことを許されない、そのために時の権力者達に虐げられ、圧迫され、抹殺され、葬りされ、結果として歴史の流れに翻弄されてきた一般庶民と言う意味での中国人である。毛沢東の人民は階級的的人民であるために、概念的には普遍的人民、つまり国境無き人民であらざるを得ないのに対して、鲁迅の其れは明らかに中国という大地に生まれ根を下ろし、そこから決して離れる事の無い人々なのである。という事は、鲁迅は日本への留学といった経験はあったものの、遂には鲁迅自身が中国という大地、そして中国という歴史をどこまでも背負ってそれから決して離れる事の出来ない人々つまり、そういう中国人の一人であるという事である。

鲁迅のこうした「中国人」への思いを最も適当なことばで表すとすれば、其れは「憎しみ」と「愛」ということになるであろう。憎しみとは、何の力も持たないで、恒に虐げられつづけてきた人々を踏みつけ、そこから自分達の利益だけを貪りとして省みない、そういう力と権力を自己利益の為にほしいままにする人間達に対する憎しみである。愛とは上述したような力なき中国庶民に対するいわばいとおしみである。ただ鲁迅の場合はこの憎しみも、愛もともに「限りなき」という形容詞がつくというところにもその特徴があるということを忘れてはならない。

鲁迅の限りなき「憎しみ」については、竹内芳郎が1969年にすでにその著書、「文化と革命」の中で詳細に論じている。其処でここでは鲁迅の「愛」について少し述べてみたい。

## Ⅲ

鲁迅の「力なき中国人」に対する「限りなき愛」とはどこに根ざしているのかを考えてみる必要がある。恐らく其れは中国の全歴史を通じてその中の中国人の負の部分の徹底的に暴き出すところにその基盤があるといえるであろう。

鲁迅は『狂人日記』の中で、中国の歴史の中



で人が人を食うということがあるということは何度も書いている。勿論これは小説であるから、まして狂人の妄想としての記述であるから、一事を挙げてすべてに言い及ぶという嫌いはあるが、しかし実際に中国の歴史には人を食うことが何度かあったのである。例えば春秋齊の桓公に仕えた易牙は、桓公に美味を献じて喜ばれようと、自分の子供を蒸してその肉を進めたという話が『管子』や『韓非子』に見える。また『左氏伝』には莊人が宋国を囲んだとき、宋人は飢えをしのぐために自分の子は食うに忍びないから、互いに子を取り易えて食い、その骨をかまどにいれて飯を炊いた、という記事が見える。また燕の国の樂毅は人質に取られた自分の息子が殺されて遺骸だけが還されてきたとき、その息子の遺骸でスープを作り其れを自分の率いる兵士達に飲ませて、敵国に報復することを誓ったという話も残っている。

魯迅も上記のうちの二例については書いているから、妄想狂人を通じてこうした歴史的事実のあることに現代人の心を喚起して、其れを人間として弾劾するという意味が強く働いていた事は当然であったに違いない。しかし魯迅がこうした逸話と其れを恐怖する狂人を通じて述べようとしたのは、とりもなおさず、この逸話に出てくる「食われた子供達」が実は「力なき中国人」その者ではないかという事であったであろう。魯迅は他の作品にも、例えば「薬」などにも同様のモチーフを変化させて使っている。つまり初期魯迅の思想はこの「無知なるそして力なき中国人」を発掘し、その無知である事の弊害と力の無さを徹底的に暴き出すところから出発しているといえる。

『呐喊』の「自序」に見える所謂幻燈事件もそのことを思わせる。日本のある田舎町の医学専門学校に籍を置いていた魯迅は、講義に使われた幻燈が一区切りついたときに、教師が見せる風景や時のニュースの画面にショックを受けたのであった。

「あるとき、私はそれらの画面の上に突然長

い間会う事の無かった多くの中国人に面会したのであった。一人の中国人が、真中に縛られていた。其れをたくさんの中国人が取り巻いていた。みんな屈強な体軀をしているが、表情はボンヤリとしていた。解説に拠れば、縛られている男はロシア軍の為に軍事上の偵察をしていた者で、今ちょうど日本軍によって見せしめに首を切られようとしているところであり、其れを取り囲んでいるのは、この盛大なイベントを鑑賞にきた者達であった」。

有一回、我竟在画片上忽然会见我久违的许多中国人了，一个绑在中间，许多站在左右，一样是强壮的体格，而显出麻木的神情。据解说，则绑着的是替俄国做了军事上的侦探，正要被日军砍下头颅来示众，而围着的便是来赏鉴这示众的盛举的人们。

この後魯迅はすぐ医学校を辞めて東京へ出るのである。その理由は、

「医学などはそんなに重要というわけではない。愚鈍で脆弱な国民は、たとえどんなに立派な体格をしていても、いかに逞しく育っていても、全く無意味なただの見せしめやその見物人にしかねないのであれば、たとえ病気で死ぬものが幾人かはあっても其れは必ずしも不幸なことではない。だから我々が最初にやらねばならないことは、彼等の精神を改造する事であり、よりよく精神を改造するには、その当時私は当然文芸が最も適当であると考え、そこで文芸運動を提唱しようと思ったのである」。

我便觉得医学并非一件紧要事，凡是愚弱的国民，即使体格如何健全，如何茁壮，也只能做毫无意义的示众的材料和看客，病死多少是不必以为不幸的。所以我们的第一要著，是在改变他们的精神，而善于改变精神的是，我那时以为当然要推文艺，于是想提倡文艺运动了。

という事であったのである。魯迅はまたあるところで、肉屋が羊だったか豚だったかの首を



切り落とすときに多くの中国人が見物に来て、肉屋のおやじは満足の行くだけの見物が集まってから初めて、その首を切り落とす、そして親父も満足し観客も満足して帰っていくというような話を書いていた。これは鲁迅が、中国人というのは物見高いものであるということを言っているのではない。先の幻燈事件と兼ね合わせて考えてみると、人間の首も豚の首も中国人にとっては同じ感慨しか呼び起こさない。つまり力なき中国人同士であっても、互いの身に降りかかる不幸災難を我身にかかるものとして共同して受け止めるという連帯感が無いということを行っているのである。「子を易えて食う」というのはそのことを如実に表しているといえる。しかし鲁迅は其処で思考を止めているわけではない。力なき中国人をここまでその意識を苛んできたのは、それなりの歴史的な経過による理由があったと考えるのである。その歴史こそ『狂人日記』の中で被害妄想狂の目を通して見た歴史なのであった。そして鲁迅にとって最も大事な事は、そういう歴史のつながりの中に自分自身が身を置いているという事である。『狂人日記』の中では次のことばが其れに当たる。

「人間を食うのは俺の兄貴だ！  
俺は人間を食う人間の弟だ！  
俺自身が食われてしまっても、しかし依然として人間を食う人間の弟なのだ！」  
吃人的是我哥哥！  
我是吃人的兄弟！  
我自己被人吃了，可仍然是吃人的兄弟！

この思いが鲁迅の力なき中国人に対する「愛」の根底的な支えになっているのである。この小説の最後は、「人を食った事の無い子供がひょっとしたらまだいるのではないだろうか？子供を救え……」で終わっている。

また鲁迅は「随感録二十五」1918年9月で次のように述べている。

「中国の子供達は、ただ生まれさえしたらいいのであって、その子がいいか悪いかは問題ではない。唯多く生まれればいいのである。その子が能力があるかないかは問題ではない。その子を産んだ親は、彼の教育に責任を負わないのである。『人口が多い』という一言はそうしたうぬぼれに目を閉じさせる事は出来るが、しかしこれほど多くの人口は、ただ土とほこりの中をはいずりまわらせて置くだけで、小さいときには人間として扱ってもらえず、大きくなってからも一人前の人間にはなりきれないのである」。

中国的孩子，只要生，不管他好不好，只要多，；不管他才不才。生他的人，不负教他的责任。虽然“人口众多”这一句话，很可以闭了眼睛自负，然而这许多人口，便只在尘土中辗转，小的时候，不把他当人，大了以后，也做不了人。

中国という大地の上で産み落とされ、捨て置かれるのは結局子供達ばかりではなく、大人も全く同じであるといっているのである。

『野草』の中に「乞食をする者」という作品がある。

「一人の子供が私に乞食をした。単衣を着ていたが、そう憐れっぽくは見えなかった。しかし聾啞であった。手を広げて、手振りをして見せた。私は彼のその手振を憎んだ。それに彼はもとより聾啞者なんかではないかもしれない。それはただ乞食をするための一つの方に過ぎないのかもしれない。

私は彼に施しはしない。私には施しをするという心は無い。私は施しをする者の上において、小うるささと疑いと憎しみを与えるだけだ」。

一个孩子向我求乞，也穿着夹衣，也不见得悲戚，但是哑的，摊开手，装着手势。我就憎恶他这手势。而且，他或者并不哑，这不过是一种求乞的法子。

我不布施，我无布施心，我但居布施者之上，给与烦腻，疑心，憎恶。



実はこの文章の前に、大声を上げて泣き喚きながら乞食をする子供の話がある。作者はその子に対しても、その憐れっぽい泣き声と態度の故にその子を憎んで、施しをしていないのである。魯迅にとってこの子は二人とも、自分も含めて、紛れも無く、力なく、無知で、齒がゆい中国人なのである。魯迅はこの後にこう書いている。

「私ならどんな方法で乞食をするだろうか、声を発するとするならどんな声を出すであろうか？ 聾啞者のふりをすると、どんな手振をするであろうか？」

「私は施しをもらえないであろうし、施しようという気持ちも起こさせ得ないであろう。私は施しをするものの上にいる者から、小うるささと疑いと憎しみを受けるだけであろう」。

我想着我将用什么方法求乞：发声，用怎样声调？装哑，用怎样手势？……

我将得不到布施，得不到布施心；我将得到自居于布施之上者的烦膩，疑心，憎恶。

この一節から魯迅の力なき中国人に対する痛いほどのいとおしみが伝わってこないだろうか。

#### IV

今まで述べて来た事は、魯迅が、力なき中国人への歴史的事象の中から抽出してきた負の評価と其れに基づいた愛である。初期魯迅の思想の中には実はもう一つ、力なき中国人に対する齒がゆさとそれに基づく愛がある。

その齒がゆさとは、阿Qが何度もその方法によって痛手から救われた「精神的勝利法」である。阿Qは今彼が居着いている未荘の村人から、からかわれ殴られるようなことがあると、「我が子に殴られたようなものだ、今の世の中は全くなっちゃあいがない……」とぶつぶつぶやいて、やがて満足し勝利感を味わうのである。な

ぜ満足し、勝利感を味わえるのか、小説を解説するというのは野暮なことではあるが、後の話を解りやすくするために少し述べておくと、子は親を尊敬し慕わしく思うのがあたりまえである。今自分を殴ったのが我が子であるとする、其れは子の方が悪いのであって、自分ではない。故にこの場合哀れむべきは殴られた自分ではなくて寧ろ殴ったほうの相手である。そう考える事によって現実に殴られていたのは自分ではあるが、自分は相手より道理がよくわかっており、相手は憐れにも人の道さえもわからない手合いである。よって自分は相手よりずっとえらい存在なのだと自認する事が出来、その自認が阿Qに満足を与え、勝利感を与えるのである。こうした満足を嘗て中国では「阿Q精神」と呼んだ事があったけれど、それは「阿Q根性」というにふさわしい。この阿Q根性を支えているのは、「自分を不当にも力で圧迫し、害を与えた者は実は、道理のわからぬ自分の息子なのだ」という思い為しなのである。阿Qは村一番の権勢を誇りまた金持ちでもある趙旦那でさえ、自分の息子であると思ひ為して虚勢を張るのである。

恐らく魯迅はこの阿Q根性を近代以降の中国人の根性そして時の中国政府の根性とみなしていたのであろう。中国は悠久の歴史とその歴史の中で育まれた高度な文明と歴代王朝の中で積み重ねられ蓄積されてきた爛熟した文化があった。しかもその文明や文化は古代から一貫して儒教が培ってきた、倫理と仁徳によって貫かれたものであった。それらは力ある他の国々がどんなにあがこうと手に入れることの出来ないものであった。つまり中国はまさしく中華であり、世界で唯一尊敬されてしかるべき大人の国であった。他の国々は列強と言われて力はあるが、事の道理を未だわきまえる事の出来ない息子の国々であった。その息子の列強が親の中国を攻め、侵略する。腹立たしくはあるが、哀れむべきは列強の者供である。

阿Qは自分の羽振りをよくするためにわけもわからず「革命党」に入ろうとする。しかし結



局は入れなかったのであったが、どういうわけか「革命党」の仲間として捕らえられ、城中を引き回される。まさか銃殺刑が待っているとは思ってもいなかった阿Qは引き回しの道中では些か得意でさえあった。やがて刑の執行が目の前に迫ったとき、阿Qは初めて事態の深刻さに気づいて、「助けてくれ……」と叫ぼうとするが、其れはもう声にさえ出なかった。

いうまでも無い事であるが、これは当時の中国がそして中国人が置かれていた極めて危なっかしい立場に極似している。魯迅はこの小説を通じて当時の中国人達に、そのいたいけで憐れで醜い自らの根性をさらけ出して見せたのである。しかも魯迅はこの小説の最後まで、

「ところが城内での評判はあまり芳しくは無かった。彼等の多くは不満足であった。銃殺刑は首切りの刑ほどは面白くないというのがその理由であった。それにあの死刑囚は面白くない事に、あれほど長く城中引き回されているながら、芝居の台詞のいくさりも歌わなかったのだ。ついて回っただけ損だった」。

而城里的舆论却不佳，他们多半不满足，以为枪毙并无杀头这般好看；而且那是怎样的一个可笑的死囚呵，游了那么久的街，竟没有唱一句戏：他们白跟一趟了。

魯迅は1925年7月「目を開いてよく見るといふ事について」という文章の中で、

「中国人は各方面のことを敢えて正しく見ようとはしない。欺瞞と欺きを以って緊要な逃げ道を作り出し、其れを正統な道と思うのである。この道の上で、国民性のひきょうさ、脆弱さ、怠慢さそして功名さと狡猾さが証明されている。一日一日満足しながら、一日一日墮落していき、それどころか日に日に栄光さえ見出していくのである」。

中国人的不敢正视各方面，用瞞和騙，造出奇妙的逃路来，而自以为正路。在这路上，就证明着国民性的怯弱，懶惰，而又巧滑。

一天一天的満足着，即一天一天的墮落着，但却又觉得日見其光榮。

と述べている。こうした思いの具体化が阿Qを生んだのである。

## V

魯迅の中国歴史の非とする点に対する、そして中国人の非とする点に対する暴露には容赦が無い。恐らく世界の作家のうちでここまで自国に対してまた自国民に対して、その非を暴き弾劾した作家はいないのではあるまいか。この暴露と弾劾があったからこそ中国人魯迅は力なき中国人をこよなく愛する事が出来たのであると思う。その愛が強ければ強いほど、その力なき中国人達の命を平然として奪い、弾圧して、あらゆる意味での利を害して省みない、力ある中国人とそれに手を貸す列強を憎んだのである。嘗て竹内芳郎が展開した論理もこの点に依拠したものである。魯迅の全生涯を貫く生き方はこの激しい怒りに裏打ちされた憎しみ、其れと力なき中国の民に対するいとおしみ、この二つに拠っている。

魯迅は三十歳代の前半で、『古小説鈎沈』を編纂し、四十歳代の後半で『唐宋伝奇小説』の整理や編纂を手がけている。前者は六朝時代の志怪小説をおもに集めたもので、後者はその名の通り唐代・宋代の伝奇小説を集めたものである。魯迅は若いときに、ベルヌの『月界旅行』、『北極旅行』や、『地底旅行』などを翻訳している。これらもいわば外国版志怪小説である。毛沢東が言うところの思想家であり、革命家である魯迅と、六朝唐宋の怪異小説とがどういうところで結びつくのか、という問題の答えは恐らくこの力なき中国庶民への愛に帰結するであろう。

中国小説史では漢代初めの『山海経』から六朝・唐宋を経て、明清の怪鬼小説に到るまで、一貫した怪異小説の流れがある。この流れは神仙思想や黄老思想ひいては道教と結びつくもの



で、人倫・仁徳をとく儒教を柱とした中国の国家指導の思想つまりは表の思想とは違って、いわば裏の思想、庶民の思想、つまりは庶民の文学史の流れである。今ここでその二つの文学史の流れについて詳しく論じる余裕は無いが、いずれにせよ魯迅の純粋な文学活動の多くはこの分野で行われている。其れはとりもなおさず魯迅自身が、自分は中国庶民のうちの一人であるという事の、無意識的自覚の現れである。

## VI

魯迅は中国人を語った。語り尽くそうとした。最も深いところの恥部を暴き出すという意味において。其れでもまだ語り終えずしてこの世から去ってしまったという気がする。

中国人が自ら中国人を語るというのは実は極めて珍しいといえる。

最近になって中国の本屋には中国論或いは中国人論の類が多く並べられるようになった。しかしその中には19世紀後半から20世紀前半ぐらいいにかけた外国人の手に拠って書かれたものの翻訳も結構多くて中国人自身の書いたものはまだそんなに多くは無いように思われる。

1994年前後に林語堂の『中国人』が再販されたのが皮切りであろうか。1996年には19世紀の終わりから20世紀の初めにかけて書かれた、マレーの華僑辜鴻銘『中国人の精神』、宋強などの編纂した『ノーと言える中国』、賈慶国『ノ

ーというだけではない中国』、1998年には、辛亥革命前夜の中国文化と西洋文明の衝突を描いた、アメリカ人E. A. ロス『変化の中の中国人』、劉智峰主編『中国を解釈する（「第三の目で中国を見る」批判）』、またフランス語で100年書かれた陳季同の『中国人の自画像』の中国語訳、台湾人柏楊『中国人史綱（上下）』、イギリス人宣教師マイコーオンが19世紀後半の中国を描いた『中国人の生活その明と暗』また、1999年には徐行・迅歩という些かふざけた名号の人物が編纂した『中国人を反省する』という本が出版された。これには中国近代革命以来の知識人たちの中国或いは中国人に対する問題発言を収録しており、中国人にとってはあまり面白くない記述も含むため、編集者の名前をなぞめいたものにしたのであろう。

以上のような出版状況を見ていると所謂これからの中国人に依る中国人論もかなりうがったものが期待できるかもしれない。その意味でも魯迅は今一度評価されなおされなければならない。

今まで魯迅について述べてきた事は、毛沢東の言う、或いは文革中に評価された観点とは違った価値観によって見た場合の魯迅の偉大だと思われる評価の極一部である。魯迅を、恐らく魯迅自身も望むであろうその人の人間性とその思想の累積過程に焦点を当てながらの再評価をする事が、今後の魯迅観にとって最も重要な課題となるであろう。

(2000年10月23日受理)